

1. 流域の目指す方向のイメージと流域特性

1-1 流域の目指す方向のイメージ(案)

現況と課題			
自然	現況	1) 夏期は霧が多く、湿潤冷涼で日照時間少ない。冬期は乾燥寒冷の気候 2) 動植物は豊富で、特定種はオジロワシやタンチョウ等 3) 中流部の河川沿いは草地。下流部は釧路市街地 4) 利用地は耕地、牧場、宅地が多く、未利用地は山林・原野が大半 5) 森林は天然林 60%、人工林 30%、その他 10% 6) 法指定は国立公園 2 箇所、鳥獣保護区 6 箇所、天然記念物 6 項目が指定 7) 釧路湿原は国立公園、ラムサール条約登録湿地に指定 8) 湿原は火山灰等の浮遊砂が堆積しやすく、乾燥化の一要因 9) 屈斜路湖と釧路湿原の 2 つの水がめを有していることもあり、河川流況は安定	
	課題	釧路川流域は、釧路川の流れが育んだ湿原に、国の特別天然記念物であるタンチョウやいまやその姿を見ることが難しくなったイトウなど、貴重な動植物が数多く生息し、ワイズユース理念に基づく自然との共生が実践されている地域である。したがって、ラムサール条約登録湿地を始めとする釧路川流域の豊かな自然環境の保全、回復が求められる。	
災害	現況	1) 地震が多発し、平成 5 年の釧路沖地震が最大 2) 堤防の強化等安全度の向上が必要 3) 近年は大きな洪水による被害はないが、資産が集中している下流部の治水対策が重要	
	課題	釧路川流域は泥炭を主とする低平地が多く、地形的特性から浸水被害がおきやすい上、近年は地震が多発している。したがって、豊かな自然と共生しつつも、安全な生活基盤の形成を図る必要があり、洪水や地震災害対策を構築するとともに、公共事業においては、地域住民の意識を反映した事業の促進が求められる。	
人口・産業	現況	1) 人口は昭和 60 年の 26.5 万人をピークに減少し、平成 12 年には約 24 万人(流域 6 市町村計)で、このうち釧路市の人口は約 19 万人と流域全体の 8 割 2) 年齢階層はピラミッド型から釣鐘型、壺型に移行 3) 漁業は北海道の生産高の 9% で、漁獲量ではスケソウダラが多い 4) シンヤモは北海道の水系別で 63% と第 1 位の生産高 5) 酪農は乳用牛が主流で、標茶町が中心。牛が大半を占め、豚は少ない 6) 乳用牛頭数及び生乳生産量は標茶町・弟子屈町・鶴居村が帯広市を上回る 7) 工業出荷額では食品製造業やパルプ・紙・紙加工品製造業が多いが、昭和 60 年以降減少傾向 8) 商業は商店数及び従業者とも小売業が最も多い。販売額では卸売業が最も多い 9) 観光客入込数は全体的に横ばい傾向。近年の観光は SL 運行やオホーツクの流水観光と一体となったツアー、カヌー利用等が主流	
	課題	流域人口は開拓期以降、増加を続けてきたが、昭和 60 年をピークに漸減傾向となり、加えて少子高齢化が進んでいる。これは、若年層の流出によるところが大きく、人口の流出を抑制するためには、雇用の場の確保、生活環境の向上に努めるとともに、福祉社会の形成に向けた、施策の展開が求められる。 北海道は、地球規模に重点を置いた食料基地としての役割が期待されており、この中で釧路・根室地域には新たな国際環境に対応した酪農や水産業の展開を進め、恵まれた農水産資源を生かした地域産業の振興が求められている。したがって、広大な土地を生かした生産性の高い酪農やつくり育てる漁業を支援する施策の促進が必要とされる。また、流域には人工林が広く分布しているが、これまでの針葉樹を主体とした植林から地域固有の広葉樹を植林することにより、生態系豊かな森林環境の回復が求められる。	
交流	現況	1) 公園緑地や交流施設が整備 2) 湿原を中心としたカヌーやバードウォッチング等が盛ん 3) 自然体験学習施設の整備 4) 公共施設のユニバーサルデザイン化	
	課題	釧路川流域では、湿原や湖沼などすぐれた自然とのふれあいを通じ、自然を学び、憩う場として広く海外にも知られる地域づくりを目指している。現在、体験型観光を進めるなど地域の特色を生かした観光振興や個性的な地域文化の創造が進められている。したがって、観光・保養など国民の多様な交流の場、アウトドア活動拠点の整備、あるいは体験型観光のネットワーク化を促進していくなどの施策の展開が求められる。	
地域資源評価	項目	現況	評価
	環境資源(生態系)	1) 湿原は有機物等の養分や生活排水等の汚濁負荷が集中 2) 湿原の両岸に分布する森林は湿原生態系の緩衝緑地 3) 山頂部や沿岸地域は植物が育ちにくい寒冷地の風衝地 4) 中流域は植生がなくなると表土が流出しやすい地域	流域の栄養分が堆積する湿地や水辺と、それを取り囲む台地や丘陵地の森林の関係に留意する必要がある
	水資源(水源涵養)	1) 湿原を含む広大な地域には河川水を蓄え水収支が安定 2) 台地縁辺部では山地に降った雨が湧出し河川に合流 3) 丘陵地・山地は浸透性が高く地下水・地表水の涵養が高い 4) 屈斜路湖周辺は急峻で降雨が短時間で流出しやすい地域	貯水機能を有する湿原と、河川や湿原への水の供給源となっている森林や透水性の高い地盤の地域の関係に留意する必要がある
	防災資源(土砂・流出堆積)	1) 湿原を含む下流域は土砂が堆積しやすい地域 2) 湿原周辺区域は地形変化により土砂が流出しやすい柔らかい地層 3) 湿原北西部の台地は森林の荒廃により土砂流出しやすい 4) 摩周湖周辺区域は新しい時代の地層で、地形変化等により土砂流出しやすい	流出した土砂の堆積しやすい湿原や河川の下流域と、潜在的に土砂が流出しやすい地域(土砂の供給源)の関係に留意する必要がある
景観資源(自然景観)	1) 縄文海進や海退により形成された低層湿原 2) かつて火口であった屈斜路湖とその周辺の火山地形	土砂の堆積によって形成された開けた平野や台地と、火山活動によって形成された変化に富む山地や丘陵地の特性の違いに留意する必要がある	

流域の目指す方向のイメージ(案)
【環境】 ●イトウの棲める川 ●タンチョウなどが生息する湿原環境の保全 ●人工針葉樹林から地域固有の広葉樹林への置換 ●河道の再自然化 ●カヌーや釣りの水辺空間 ……
【安全】 ●近自然型工法による河道改修 ●洪水や地震災害に強いまちづくり ●植林等による土砂災害の防止 ……
【くらし】 ●広大な土地を生かした酪農 ●環境保全型農業 ●つくり育てる漁業 ●林業や水産業、酪農など、地域が一体となった河川や海の環境保全 ●畜産廃棄物等の有効活用 ●資源循環型の産業づくり ……
【健康・交流】 ●北の国際交流 ●酪農体験による交流 ●自然と共生できる体験型観光 ●地域資源を活用した通年滞在型観光 ……

流域の計画	
(全国総合開発計画、第 6 期北海道総合開発計画 第 2 次釧路ふるさと市町村振興計画、6 市町村まちづくり計画)	
自然	
自然環境保全の推進	北海道の美しさと雄大さを引き継ぐ環境の保全。釧路川周辺の自然と酪農牧歌的風景が一体となった美しい河川環境の保全
釧路湿原等の保全	ラムサール条約登録湿地を始めとする豊かな自然環境の保全・回復。国際的にも重要な釧路湿原の自然環境を保全し、次世代に引き継ぐ
釧路湿原の保全とワイズユース	湿原の保全や環境保全活動の推進、木道等の自然利用的な整備
自然保護意識の高揚	自然とのふれあいを通じ自然を学び、憩う場として広く海外にも知られる地域を目指す
産業	
農業の基盤整備の推進	我が国の食糧供給基地として、広大な土地を生かした生産性の高い大規模土地利用型農業の展開。農業系廃棄物の適正処理の推進。経営体質の強化を図り、自然を大切に環境保全型農業の推進
林業の基盤整備の推進	多様な森林整備の推進。河川周辺の樹林帯等の保全。生産性の高い林業の育成。森林施業の推進
水産業の基盤整備の推進	つくり育てる自然管理型漁業の展開。内水面漁業による増殖事業の推進
地域商業・工業の育成	恵まれた農水産資源を生かした地域産業の推進。坑内掘炭鉱等の新技術分野における海外との共同研究や技術者交流の推進。資源・環境循環型の産業づくり
観光産業の推進	アウトドア活動拠点や体験型観光のネットワークの推進。通年型・滞在型観光の転換
地域整備	
生活環境の整備	人や地域のつながりのある豊かな暮らし。貴重な自然景観、豊かな森林・田園風景の保全と花と緑にあふれる美しい街並みの創造。農漁村生活の快適性の向上。下水道処理区域の拡大
身近な暮らしの安全の確保	下水道の水質汚染や富栄養化の防止対策の促進。護岸の整備や堆積土砂への対策推進。被害を最小限にする防災・消防体制の整備
住民の災害対応力・防災意識の向上	地域防災計画策定や防災備蓄体制の確立。防災体制の整備とボランティア活動の充実
高齢者福祉等の充実	高齢者や身障者にも配慮した人々が親しめる水辺づくり。福祉団体やボランティア組織の育成
住民参加のまちづくり	川・森づくりへの住民参加。まちのシンボルや特産品の活用促進。市民と行政のコミュニケーションの活発化
河川環境整備	河道の再自然化、多自然型川づくりの推進。魚道の整備等による河川環境の保全整備。水と緑のネットワークの形成
教育・文化	
環境教育・環境学習の推進	自然に学び、それを活用できる人材の育成。学習指導者の養成と確保
生涯スポーツのまちづくり	生涯スポーツの観点に立った社会体育の推進
文化財の保護・保全	アイヌ文化の保存・振興。芸術文化への興味と関心の向上
交流	
高齢者・障害者の社会参加の推進	観光地のバリアフリー化の推進。ノーマライゼーションを中心とした温かい地域福祉活動の推進
地域間交流の推進	姉妹都市交流事業などを中心とした地域間・国際交流事業の推進。地域間交流の推進
国際交流圏の形成	北の国際交流圏の形成

1-2 流域特性一覧

釧路川流域の現況等について以下に整理する。

1.自然

- 1) 気象は夏期の霧が多く湿潤冷涼で日照時間少ない。冬期は雪の少ない乾燥寒冷の気候を示す。このような気候条件から水田等の利用には適さず、酪農等が営まれている。
- 2) 動植物は豊富で、特に釧路湿原には多様な生物が生息・生育し、流域の貴重な財産となっている。なお、釧路湿原は国立公園のほか、一部、ラムサール条約登録湿地に指定されている。
- 3) 動物ではオジロワシやタンチョウ、イトウなどの特定種のほか、ヒグマやエゾシカ等の哺乳類も確認されている。
- 4) 森林は天然林が60%、人工林が30%、その他10%となっている。源流部の屈斜路湖周辺や支川の大半が森林地帯で、ここに自生する樹木は自然生態系上、重要な役割を担っている。
- 5) 土地利用は大部分が山林・原野等の未利用地で占められて、利用地は多い順に耕地、牧場、宅地となっている。流域は上・中流部の河川沿いに草場が広がり、下流部には釧路市街地が位置している。
- 6) 法指定状況は2箇所の国立公園をはじめ、6箇所の鳥獣保護区や6項目の天然記念物が指定されている。

2.災害

- 1) 流域の地震災害は、近年では平成5年の釧路沖地震が最大で、釧路市では震度6にまで達し、より安全な防災対策が求められている。
- 2) 釧路川は釧路沖地震により、堤防天端の陥没が生じるなど、この対策として、堤防の強化や河川堤防での地震観測システム等が整備され、安全度の向上に努めている。
- 3) 釧路川の主要な洪水は戦前では大正9年8月の洪水があり、新釧路川開通前で下流部の釧路市街地が浸水したと記録されている。戦後では昭和22年9月洪水が最大である。
- 4) 近年大きな洪水と被害はないが、今後、大きな出水による被害が大きくなる可能性がある。

3.産業

- 1) 流域の漁業は北海道の生産高の9%を占め、沿岸部に位置する釧路市と釧路町を中心に行われている。漁業生産量は近年、減少傾向にある。流域の特徴的な魚種にはシシャモが挙げられ、北海道の主要水系別では63%と1位の生産高を示している。漁獲量ではスケトウダラが最も多い。
- 2) 流域の酪農は乳用牛が主流で、酪農が盛んな帯広市と乳用牛及び生乳生産量を比較すると、標茶町・弟子屈町・鶴居村で帯広市を上回っている。流域は北海道や帯広市に見られる酪農形態とは異なり、牛が大半を占め、豚はほとんど飼われていない。
- 3) 酪農の事業体数は減少しているが、経営体系の大型化が進み、生産額では概ね横ばい傾向を示している。酪農は標茶町を中心に営まれている。

- 4) 工業は出荷額でみると食料品製造業やパルプ・紙・紙加工品製造業が多い。工業全体的には昭和 60 年以降減少傾向を示している。
- 5) 商業は商店数及び従業者とも小売業が最も多く、販売額では卸売業が最も多い。
- 6) 観光産業は全体的に横ばい傾向にあり、近年の観光では SL 運行やオホーツクの流水観光と一体となったツアー、カヌー利用などがあげられる。

4.生活

- 1) 人口は開拓期以降、増加を続けてきたが、昭和 60 年の 26.5 万人をピークに漸減傾向となり、加えて少子高齢化が進んでいる。流域の活性化のためには、特に若年層の流出を抑える必要がある。
- 2) 平成 12 年度の国勢調査では流域 6 市町村の合計が約 24 万人となっている。この内、約 19 万人が釧路市の人口で流域全体の 8 割を占めている。
- 3) 年齢階層別の推移では昭和 40 年のピラミッド型から、昭和 60 年の釣鐘型、平成 12 年の壺型と移行しており、少子高齢化の進行が伺える。
- 4) 流域の都市公園は釧路市をはじめとする 4 市町に整備されており、住区基幹公園が 172 箇所、都市基幹公園が 5 箇所、その他公園が 2 箇所整備され、計画の 88% の整備率となっている。
- 5) 近年では高齢者や障害者が安全かつ円滑に行動できるよう、公共施設のユニバーサルデザイン化が進められている(具体的な施設としては園路、斜路、トイレ、水飲み場等)。

5.アンケート

- 1) 治水への安全性の信頼度は高い。
- 2) 治水対策と環境保全の調和は第一の目標と考えられており、河川環境を重視する意見も多い。
- 3) 流域で一番大切な動植物はタンチョウである。
- 4) 釧路川の水質で、汚れ等を指摘する回答者は多い。
- 5) 湿原の乾燥化について、自然のスピードより早く感じている回答者は 30% を超えている。
- 6) 釧路川の利用で、花火大会等のイベント時以外で利用する回答者は 15% 未満である。
- 7) 釧路川に望むことは「水のきれいな川(71%)」で最も多く、次いで「洪水に対する安全性(40%)」が多い。
- 8) 釧路川の将来像
 - ・ 基本的に手を加えず、蛇行の美しい川を保全する。整備箇所は湿原風景を想わせる姿への再生が期待されている。
 - ・ 釧路川は人間生活を含め、多くの動植物を育む母なる川であり、水がきれいな川であることも一つの将来像とされている。

9) 整備の方向

- ・ 地球的視野での生態系の保全と流域住民の安全な暮らしの実現という相反する方向の調和に大きな関心があり、最低限の安全性の保障を前提に前者を重視する意見が多い。
- ・ 自然との調和では、開発する場所と保全する場所との明確な使い分けや、非難情報等の施策の展開に重点をおくなどが挙げられている。
- ・ 総合的な川づくりでは、河川行政以外に、地域住民のニーズやその他関連する事業・施策等を含めた一体的な検討が必要と指摘している。

10) 治水対策

- ・ 流域の保水力低下による洪水の発生や湿原の乾燥化等が懸念され、その取り組みとして、上流や支流域における農地開発等のために伐採された森林等の再整備や直線化された河川の元の形態への修復などが挙げられている。
- ・ 実現としては市町村・道・国、そして地域が一体となった取り組みが必要と指摘している。

11) 河川環境の整備・保全

- ・ 地球環境的な視点から自然環境を保全する指向の一方、子供から高齢者までが水辺に親しまれるような環境整備への期待が大きく、特に次代を担う子供たちの自然観察等を通じた環境教育の場として注目されている。
- ・ 市街地部のコンクリート護岸を多自然型護岸に再整備することやふん尿処理の規制、ゴミなどの投げ捨て防止、魚道の確保など、多方面にわたる意見・提案が挙げられる。

12) その他としては地域住民の意向が反映されなかった従来の河川整備への不満や縦割り行政の限界など、河川行政全般への不信感も挙げられている。

6.河 川

- 1) 釧路川流域は泥炭を主とする低平地が多く、近年地震が多発することから、特に流域資産の集中する下流部の治水事業の推進が重要である。
- 2) 釧路川は屈斜路湖と釧路湿原の2つの水がめを有していることもあり、道内他河川と比較し、流況は安定している。
- 3) 釧路川本川の河道は緩勾配で、湿原区間で合流する主要支川は急勾配の山地河川が多い。このため、火山灰などの浮遊砂が湿原に堆積しやすく、湿原乾燥化の一要因となっている。
- 4) 河川敷地は釧路市や標茶町の緑地公園をはじめ、水郷公園(弟子屈町)やカヌーポート(標茶町)等が整備されている。
- 5) 釧路川河川緑地は規模が大きく、パークゴルフ広場や野球場等が整備され、地域住民に利用されている。